

2018.9.13 金子

「南北戦争と明治維新」(No.10)

今年は、維新 150 周年に当たり、NHK の大河ドラマでも「せごドン」が放映されており、先日は丁度大政奉還でした。

今年の 6 月 22 日に、在英国日本大使館に於いて、山口大学、鹿児島大学そして、University College London (略称、UCL) による『維新 150 周年記念国際シンポジウム』が開催されました。UCL は長州ファイブの留学先でもあります。

山口大学からは、岡学長始め、三浦副学長や林裕子特命教授など出席され、宇部ロータリクラブからは、藤井正夫夫妻と私ども夫婦が参加しました。

又、当日は丁度、ジャパン・ハウスの一般公開セレモニーが開催され、私共夫婦はそちらにも参加してきました。

ジャパン・ハウスとは、日本の外務省のホームページによると、概略以下の様に説明されています。

『日本の戦略的対外発信の強化に向けた取組の一環として、「オールジャパン」の対外発信拠点であるジャパン・ハウスの設置を進めています。平成 29 年 4 月にサンパウロ(ブラジル)、12 月に

ロサンゼルス(米国)、そして今回ロンドン(英国)に開館されました。』だそうです。

今日は、シンポジウムに参加していた大学の後輩に当たる薩摩伝承館の館長から、UCL 表敬訪問時のランチタイムに聞いた明治維新における、薩摩藩から見た当時の情報活用の一端をお話したいと思います。

私は、理工系出身者で、高校の選択科目で『日本の歴史』は選択していません。従って、これからお話する逸話を皆さんはご存知かもしれませんが、江戸出身の私にとって、非常に新鮮な話に聞こえました。

ご存知の様に、江戸時代、唯一、長崎の出島だけが対外的窓口であり、江戸幕府が事実上の貿易を独占していました。

薩摩は、その植民地であった琉球国を中継地として、積極的に密貿易を展開していたそうです。

1861年に米国で南北戦争が勃発した結果、米国での綿花生産が激減、世界は綿花飢饉と言われる時代に突入しました。この為、綿花相場が3~5倍に暴騰、この状態は1865年に南北戦争が終結するまで続きました。

薩摩藩の御用商人で、密貿易を一手に引き受けていた、8代目“濱田太平次”は1861年、上海の商品市場において米国の南北戦争の結果、綿花が暴騰しているとの情報をいち早く得ていましたが、この情報は薩摩藩内で徹底的に極秘扱いされたそうです。

また、薩摩藩は、綿花を全国から何食わぬ顔をして買い集め、これを10倍以上の高値で売り抜いたそうです。その利益は1861年～1865年の5年間で、現在の通貨価値で7,000億円相当とされています。

コメント [k1]:

アメリカの南北戦争が1865年に終結すると、アメリカ政府は荒廃した国土の復興と南北融和の為に、不要となった武器弾薬を全て世界の市場で処分しました。

そこで薩摩は綿花市場で荒稼ぎした7,000億円を利用して、米国が放出した武器弾薬を安値で購入、江戸幕府を上回る圧倒的な軍事力を身に着けたそうです。

これに慌てた江戸幕府は、フランス政府に接触して600万ドル、現在の通貨価値で約100億円の借款をして、フランスから武器弾薬を購入、更にフランスから陸軍軍事顧問団を招聘して、大きく水を開けられた薩摩藩との軍事バランスを是正しようとしてきました。

これに対し薩摩藩は、江戸幕府の信用を失墜させて、先の借款をキャンセルさせる事を目的にパリに乗り込みました。薩摩藩は、1867年のパリ万博では単独で出展を果たしており、ベルギー生まれのフランス貴族“シャルル・ド・モンブラン”伯爵の助言を受け、パリの勲章職人に薩摩藩琉球国勲章を作らせました。

こうした薩摩藩のキャンペーンが成功してナポレオンⅢ世は1867年、江戸幕府への借款のキャンセルを決め、資金的に軍力増強が出来なくなった事を悟った、江戸幕府の最後の将軍徳川慶喜は、翌1868年に江戸城の無血開城へと至ったとの事です。

もし、江戸城無血開城が出来ず、薩摩藩が中心となって江戸城を攻撃して居たら、江戸は火の海となって多くの犠牲者が出たばかりか、その間隙に乗じて、日本を植民地化しようとする欧米強諸国の侵略を受け入れざるを得なくなっていたかも知れない。

それにしても、運よく、旧式とは言え、南北戦争で使われた武器弾薬で江戸末期の日本が武装出来たので、列強による武力介入はリスクが高く、回避できたのではないかと思います。

当時の日本は、南北戦争勃発と終結と言う運と、薩長連合の情報と知恵のフル活用には感心させられました。

これで、会長の時間を終わります。

